
天使の絶望

麻未夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の絶望

【Nコード】

N85880

【作者名】

麻未夢

【あらすじ】

背中に白い羽が生えるという奇病。

その病気の特効薬は、ただ一つ――。

背中に羽の生えた『私』は入院し、医師の言いつけを忠実に守りながら、治療が終わるその日を待った。

世界中に、突然背中に白い羽が生えるという奇妙な『病氣』が蔓延し始めて、既に5年の月日が流れている。

北欧で初めての『奇跡』が現れた次の日には、南米に二人目の『奇跡』が現れた。

そう、これは最初は病氣ではなくて『奇跡』と認識されていたのである。

背中に白い翼を生やした彼らの姿は、まさに絵画に描かれる天使そのものだったのだから、それも仕方のない話だっただろう。

しかし、三番目、四番目と世界各国で相次いで出現した『奇跡』は、さすがに人々を少し困惑させることとなった。

そして、100人目の『天使』の出現辺りから、まるで堰を切ったかのように爆発的に増えはじめたその『奇跡』は、そこに至って初めて『病氣』だと認定されたのである。

その病氣が私の身に降りかかったのは、今から1ヶ月前の事。

すでに特効薬は開発済みであり、だから私は特に悲観することなく政府指定の病院に向かい、入院の手続きを取った。その際、入院中の外部への連絡、そして治療に関する情報を外で話す事を禁じるという同意書へのサインを求められ、少々不審を感じながらも私は快くそれに了承した。

そして看護師に案内された病室は、テレビどころか時計もない、酷く殺風景な部屋だった。

だが、窓だけはやけに大きく——それは背中に羽がある状態でも楽々ぐぐり抜けられる程の幅がある——、病氣が治るまではそこからの眺めだけが慰めらしいと、私は小さく息を吐く。

背後でドアがノックされ、医師が入ってきた。

特に問診もないままに医師が私に提示したのは、奇妙な形をした黒いプラスチックの容器だ。

中には容器の色と同じく黒い丸薬が、毎食後一粒ずつ飲んで、ちょうど1ヶ月で飲みきるだけの量が入っているらしい。

「1ヶ月後に、また診察に来ます。その時に、瓶の中に一粒でも薬が残っていたら、あなたの病気は一生治りません。治療のやり直しは不可能ですので、くれぐれも飲み忘れのないよう注意してください」

同時に、その容器の特殊な形状が、容器を傾けた時に薬が一粒だけ落ちてくる仕組みの為である事を教えられ、加えて、光や湿気に弱い薬なので、飲む時以外は容器から出さないようにとの注意を受け、私は頷いた。

食後に薬を一粒だけ取り出して口に放り込み、水で流し込む。それは三日も経たない間に習慣化され、殆ど無意識ながら私は医師の忠告通り、一ヶ月の間、毎日毎食後に、一度も欠かすことなく薬を飲み続けた——筈だった。

私の目の前に差し出された医師の手の上には、容器の中にたった一粒残されていた薬が乗っている。

「そんな………」

——飲み忘れてなんかいない筈よ。

しかし、そんな私の困惑などいっさい気にも留めず、医師は非情な通告を私に下し、病室を去っていった。

その時の私の絶望は、とてもではないが言葉には出来なかった。何故なら私は、初めこそ『天使』として扱われ、良い気になっていた最初の『患者』達に訪れた未来を知っていたからだ。

彼らは、それが奇跡ではなく病気だと解った途端、掌を返したように人々から忌み嫌われる存在となり、そして羽ばたいて宙を舞うどころか、自分の意志ではピクリとも動かせないただの重しを背負った苦痛とストレスに耐えかねて、次々に自らの命を絶ってしまっ

たのである。

この話は、特効薬が開発された頃に同時に世界に向けて様々な言葉で発信され、それこそ世界中の人々が老若男女問わず知っている話だ。

更にはその全員が、その白い翼で天に帰る事を望みでもしたかのように、高層ビルの屋上や高いタワーの上からの投身自殺だったという事も非公式ながら伝えられている。

「……………」

私は窓辺に立ち、きっと彼らもその最期の時にそうしたに違いないと、絶望的な思いで真っ青な空を見上げた。

「お世話になりました」

そんな言葉を残して、にこやかに病院を後にする女性の背中を送り、医師は内心溜息を吐く。

—— 毎回毎回、気が気じゃないよ……。

この病気の唯一の特効薬、それは『死にたくなる程の絶望』である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8588o/>

天使の絶望

2010年12月1日18時53分発行